

白
檻
に
触
れ
て、

作
函
波
窓

〈登場人物〉

蛹

狩人

タマゴ／妹

マキ

ユキ

ノウミ

ホウコ

マリア

ミツバ

なじみ

ピーク

マーブル／オリガミ

白檻に触れて、

白檻に触れて、

雲の上を飛ぶ、羽の生えた美しい少女達。眼下、地上には何も残されていない。その対比、決して混ざることなく、薄い空気の膜に投影されている。自然も、獣も、美しい大気も。綺麗な色は剥げ落ちて、色盲の見る世界のように、下界は灰を被っている。それは、我々の知る地球ではもはやない。「天使」と呼ばれる少女らは、雲のように白く固まった命を、せつせとあちこちに運搬している。その中に一人、動きを止めて、地上を見下ろしている少女がいる。彼女の名前は蛹。

蛹

私達は、天使であつた。雨が天に昇り、雲へと姿を変えまた大地へ降り注ぐように、命もまた循環を繰り返す。昇華し凝固した命の雲を、切り取つては地に降らす。そんな単調な作業が、天使の仕事であつた。私達の住まいもまた、この命の雲の上にある。時々見下ろす地上が、美しく逞しい色をしていたのは、何世代も前の天使の時分までだったと聞いている。今は灰の色をしたこの星が。遙か昔には「シゼン」という命を携えていたそう。私の頭の中だけで無限に広がっていく、豊かに呼吸をするその景色。少女でなくなれば、天使で居られなくなる。ここで下を見ていられるのも、あと少し。私は罪を犯すことにした。

少女達が、蛹のもとへ集まつてくる。

ボウコ どうするの、蛹？

蛹 盗むの。

ユキ 何を？

蛹 かつて自然と呼ばれていた命。

ノウミ どこにあんのよ、そんなの。

蛹 神のお部屋に。

タマゴ 何で知ってるの？お姉ちゃん。

蛹 小耳に挟んだの。もはや地には返せない命だから、資料として保管してるって。

マキ でも、もう育たないんでしょ。意味ないって。

蛹 地球の記憶が強く働く土地を見付けたの。そこに埋めれば。

ミツバ また滅ぶでしょ？どうせ。

蛹 でもね。私見たいんだ。命が美しいって瞬間を。この目に焼き付けたい。

マリア それだけのために？

蛹 それだけのために、私たち生きているんじゃないの？だったら、なんで私達は生きてるの？

間

蛹 私、自分の命と仕事に誇りを持ちたいの。死ぬのよ、このままじゃ、魂が。私より先に。だから

手伝って。

8人、神の社から、命を盗み出し大地に降らす。その瞬間、落下していく少女達。羽は少しずつ焼かれ、速度を上げていく。

蛹 掟を破れば、罰が下る。羽を焼かれ天を追放され、数多、命と共に落下する私達の視線の先には

蘇っていく自然の姿があった……なんだ。この世は美しい。涙が出た。その水晶よりも早く落ちていく、私の体。剥がれ落ちそうな意識の中考えたのは、ここに放り出されるなら、どんな私になっても生きていける。そんなことだった。生きてたい。そんな程度の願い。お願い、生きていさせて。あと地上まで数メートルのところで、私の目の前を、鮮やかな紋様を持つ蝶が横切った。

地上へ墮ちる少女ら。衝撃を合図にするかのように。無数の蝶、飛び立つ。白いキャンバスに一瞬だけ景色が映る。それは彼女らの原風景。色鮮やかな蝶の羽のみで作られたモンタージュ。誰もがいつか見たであろう神の息吹く自然が、忽然と現れる。

銃声。
その音に反応するよう蝶が去っていくと、あとは鱗粉だけを残し、
冬山の稜線がくつきりと浮かび上がってくる。

木の枝が揺れる。その音が骨の軋む音にも似て。

狩人らしき人が立ち上がり鳥を一羽、袋に入れる。

小屋の中へと入っていくと、既に他の人が暖を取っている。彼は葬技師のなじみ。

狩人 山のモノじゃないな。

なじみ やっぱり鼻ですか？

狩人 鼻？

なじみ シンケは皆、動物並みに五感が効くと聞きます。私から人非人の匂いを嗅ぎ分けたのかと。

狩人 挨拶だよ。

なじみ え？

狩人 山のモノは、まず挨拶をする。シンケなら勿論、他の山から渡ってきたモノでも、敬意を込めて、その山の民へと、自分達のやり方で挨拶をする。

なじみ なるほど。しきたりにやられたのか。

狩人 ……お前、なんだ。